へ13
3757
7

門へ13
3257
巻 7

其翁のものかたりを書永元年申の春朝臣の院曲世の
流行しものを書林に雪月花の四季の景色を一冊に
綴りて年毎の発兌を嗜みとなす・・・
発兌毎に一編のきこえありて・・・
をもむきの句あり心あるひとの評をこひ
稿もたえざれば文句とのみ気まよひくち塚の外新
これ翁のおもてむきの句と一村雨のちりくとふるをし

八十六歳 京山

死

○竹之丞母　貞しも寿

○竹の丞妻　朝顔

○忠義

○梅野左門　春吉

○浪人山中熊五郎外二人

○音川夏元

○小性細井竹之丞

○大内多田良の家臣　梅野左門

下女小さく

○竹之丞妻　安佐義

○菊井六之助

○密夫

○あざみ　あふさん　ひの吉

朝顔物語七編発端

をとり川のつりとろ
けらいれ
そ井竹
の亟うう
まあぎを
とりあへんかとたう
ゝるのかさやと
ア、るきざみ
たそこやのむす
めゆてありしわ十
二才の時いゝなづけ
ゐん菊井六のみとふ
ものふうふ
うのおちゐー
あぎをうんひの
吉とてでき
とのあぎをとり
ひとー六の
んだうけてたひ
あぎをいきりのため
とてかと川とのうち
大角とのそてゐん
とよーてこるか
うこのかっぎをふ
いそゝろふ大角とのゝ
お目ふやすり

あぎをゆふ
んびの吉

竹の亟ま
あぎみ

ゐりけるふあぎを
ゝろかーとぎゝるの
ゆふ大角とのゝ
おきあつをみぬきて
ゝ名きあつをみぬきて
ゝるのーはたいもんふ叶ひ
のせいふつのりてんをうんぎ
ーおの亟ふつのりてんをうんぎ
三すゐらんのあぎを
りつていゝるけるゆふ
だんきとあぎを
てかくゝろり
ちろ
ろふ竹の亟ぐ
つまりゆでぎをとる
るへ二へんふんへーく
ちるせり

寝太夫
菊井六のみ

▲さてあぎみ竹の亟ぐつまとゐりて
のちかんだうゐるゆふ菊井六のみあち
ちふふ月をよをーぐかまつてゝより
京へのりて竹の亟ぐろくうゆをゝ
ゝをけるふぐーんぞをもとゐふわを
みをいいぜんぐつをてあぐる女な
ゐをたぐひわおとろきくゝろろ
かーとぎゐぐもゐれぐいろゆもゝ
せぐれいある人ぎふおりけり
▲さてある日竹の亟ぐとまりかんの
よあぎを六の分をれやへ去のべをーを

竹の亟ゞ毎てのおやふ
ろうけらる亟しゆ糸そのよ
あざこ六のみあざみぞ
なその時よりめしつひ
うる恵玉の下女をとぐを
つ亟てうけあちるー
そちゆそうんだうう
たるあざみぞあのゆき
あひ四人づ亟ゆそる
さこのうまうくへぐゆく
ろうスあざこうぐあのくゆ
百五十ものちつぐーけうぐ
目方あるき西玄あざこぐ五十ま
六の公ぐ五十ま下女のをとのへ
五十ありこせおきしまおこげなうう
ゆどやふさりしよ五十まとりみぐ
するの六へんふあるせり

▲さそ又竹の亟つくくこう亟ま
ぬすを亟めぐこきをうつべ
きふあざこうあ亟ーの
ゆぢ大角どのくてうあいあり

女あ玄大角ぢのくありいくをそぐかりて
めぐこきのねぐひいらこさすあのびてうふひたる
かうれ月のちはありておびもをうこのゆ玄
あざこうかけあちをさひそひふき西ぐぐん
とそひきとりあきーゆ玄日うこたちてのち
あんぐこのねうひをいこーゆふさのさま
きくいと亟つを竹の亟をめーておやせけうへ

細井竹之亟

（二）
あさみ六のみを十とめ
めでたくこうくりて
もあじんのれいき

つ亟ぢこきをのとしゆをこうくこうしはうの
あざこそちち大角どのくてうあいふ
をとりつ亟ふあちひ
てこきをくのこうあい
ありしあ玄ふ
ゆもすべうりしう
あちのふきくを
ちぐかりゆるー
あのりゆんちうれふ
うろうりてあこみをも
うちうとうこう
うろうこきをも
ろろしこれよ
こすぢふゆぐこ
きをうちて
そちぐ出ておだう
もたつべーと
ろ周とーてなづ
うこ百おゆうり
けりこれらのうどもれくーく
六へんふあるせりこれが行の亟づあざみを
うつゆぐこきうちふこくしのうろうこのこ多ふ
あこぢもあ　んのうろうこをもそろこさんと
てのくこきうちのりあのこそのくぢたびひ
ふんをつくしうれの内作あうむすゆ
船うれをやうくのの亟てきやくぐん
ふひきとうちろも見のちみてうこ月も
ちうきふありこそべ一日もこゆく（一）

竹之亟　忠僕長助

どそりをもこ
らし月の武士
だうをもこそく
もの
て

たびこひき
うこんべ

一
むきのぐんせいをもよおして
のくろづるの
のうぶこゝろ
をもきろえ
やと心せる
たびのそうこゝろのありべきみを
こゝろのうちにあざゝろゝあるきとうみゝう
へとんさーていをぎけり

二段
かくて行の亜とあるつゝしぎく
きうしゆあるさんとて茶やへ入りたびとも
をもあさんとそ茶やへ入りたびとも
きうのねこひてみるかさりくへめづり
めーをいひつゝみをみおろうーげを
うみをみつゝけーろうみやげてぜんを
ゆもちきろうをとうてねろうけり

細井竹之亜

さてもみへあもちこゝち
ろうーをたつゆろさ
ーおのれとりおいこ
ーときあざこゝ
六のみあざこゝあふ

こんひの吉こんつせ
みてろくしの舟へのる
をろて大おろろこひすく
さゆををいこーうのめーやへをを入り行の亜おもひ
たんをさをおたつみのろくき
たつくこ今ろくこーの歌へのり
まーこりさくちりをきなさ
ゆまゆをときりそこひたつ行の亜
をーをるげすてかこるひつさけ
心いさきくあーのとハ旦ふ
つずこもさうろおこふ
あきろう又へもたゝ
うひろうせんろんる
かくりとゆをへ
けやとーけり
さをとるもん
せくまふ
ろうひをりん
とんろうかこ
ろのこりこもる
さうゑぎやく
ーあつうとうり
ーあさむくひま
ろうせへ行の亜
ろりろくりるを
いんあとゆそこひ
やさんたつ(一)

忠や
長次

(二)ぬろ
ろきをを
ろろみたりと
ゆらいろきこせ
ーてをるーいへと
ひけともうころぬ
ちろくのそとたぐ
めろく
を
とおりひ
りりこも
さうれを
もろりを

ろろさ子へうこきとん
ろるーんろうろゆろうろるふ
ようこんめうすんー行の亜
ーおさいめりてうろこいゆろこぬ
めろこきうちんせくきくみをとりの
いろりあとおひうけてうちと
らんおろくりていく家やもあさひ
ヤさん・こもさうかくく亜おたる
りのつをを人ふ
ぬすをろーろう
けのおたり

忠候長吟

竹の巫

てんがい

てんぐい

ゆう〳〵と入とりひけまいてんぐいハ
ちくらくらくらくらとめくまくつけてゆうゆうと
とうの尺八をうちとりてひらりとまろびをせし
かんひんさきのかすりきけちしるそうとまろび
いさいせんかう
竹之助

あら長次

かんかんかうしゆうのざいてんぐいやけのうちりてこうべをうちわりてこうべをうちわりてこうけり竹の笛ハ用のものこそうりきざうけざんめりおかねうくしてこさくんとおかねうをめ〳〵やのあくまをよびとめ又もうりあひふうりおきてへ又もうりあひふうりべしとりあふもみこーふさして色さうりけりひ又ハふ一ッのさをこうこふんざまちまちのろくろくと竹の笛をおうくびんひうのとろくへものくのこそひげるのうりんひうのうりきこうやもこうんふんのすんうりんふんとうのうりぬかんふんたるうのそうんせず人をふくけ人をそうくふんをそうくふんをそうくふんを

(二)

あざみ下女ふすま
けりあざみ
へ大事ござ
おてるひめさま
べ下女あそう
ありしうど
おとげ
ろうへ
とこ
あさ
みそか
ひまう
あざみ
まぐべし
なんぼ
のごと
づくうの
ふ
あざみ
ぬいのとくのをか
いて人まをだ
ふるこきっと
るとだれ
ちびあか
まだおみく
まれけり
▲そこまで

毋

(三)

そうお
ひとうのり
あんふじ
あとげ時八女十
そまるとも

(四)

のちある
女のひとう
たびつまを
のこあてざい
よまそつぐ
ろくくへらぞ
やこあのひ
つまうあげ
ちろうそのは
のタろうこあ
菓子をお

▲ひきあうことぞへ
つろひらひろ
ひをさますこ
ろうべし

三段

そこ行の亜ろは
のちのくのつ下の
まきみりべし
ろくんるてあさこそ下女の
ちびあざみ六のみを
てれて行の亜ろうさをうけあち
することき百五十あもちいびし
百あいあざこと六のみが五十あも
づのちやとげみるよ十あも
いこをおきくろふたびへりでく
のちおとげタろうりおてるよあ
ろうあげちろうりおきを
ちろうこべし

▲そうくうのとの
りタへさうみの亜戸
つうのざいの百姓
のやすめろうし
ふ十八のとしかま
くへいでくへよ年
のあいろあちこち
とやきをなて
サ二のとしかこ亜
ろうちこのとしいたて多て

(一)

又六

おとび

（二）

又六
おつま
三

おたみ

二十五ぢうひちやくだして
そうしやあくまみもきうをも
まるくみせんでござまのおつげで
しろさまさうてござり升
かしこまつてそれへうまくいたし
そひにのおつもでへたくの
きさこやでへとめ升まい
どこのちやくまもあき
んとやくそくやが
ござり升そこへおとまりの
うさぎさせ
ちとの
しろさま
よい

（一）

（二）又六
ちよこざやでへ
さあ升
きついこまと
おやんまひさん
かさんの名へあやと
りやくへまひさくしへ
さいむすめへたやと
十升あやこへこと
しへさげとりひ
まずたつまのの
名をちくなへ
もあやうしな
へあうしな
ちくさん・茶やう
のかくへさやうで
ござり升これ
かくつぎの者
くまて一りま
すどうぞいおとまり
ござりもやくのこう
ロふかしまやと
りやうこへおとまりる
さまさせ

京山老人作 國貞画

又六

（一）

おとげなふさんようこそおてあそばしてもかくうたづねてのそうろうふ

（二）

よみ人しらず

よみ人しらず

おさん

天つづく

▲此下の方へ伝く下のきよりあり

（一）

四段目

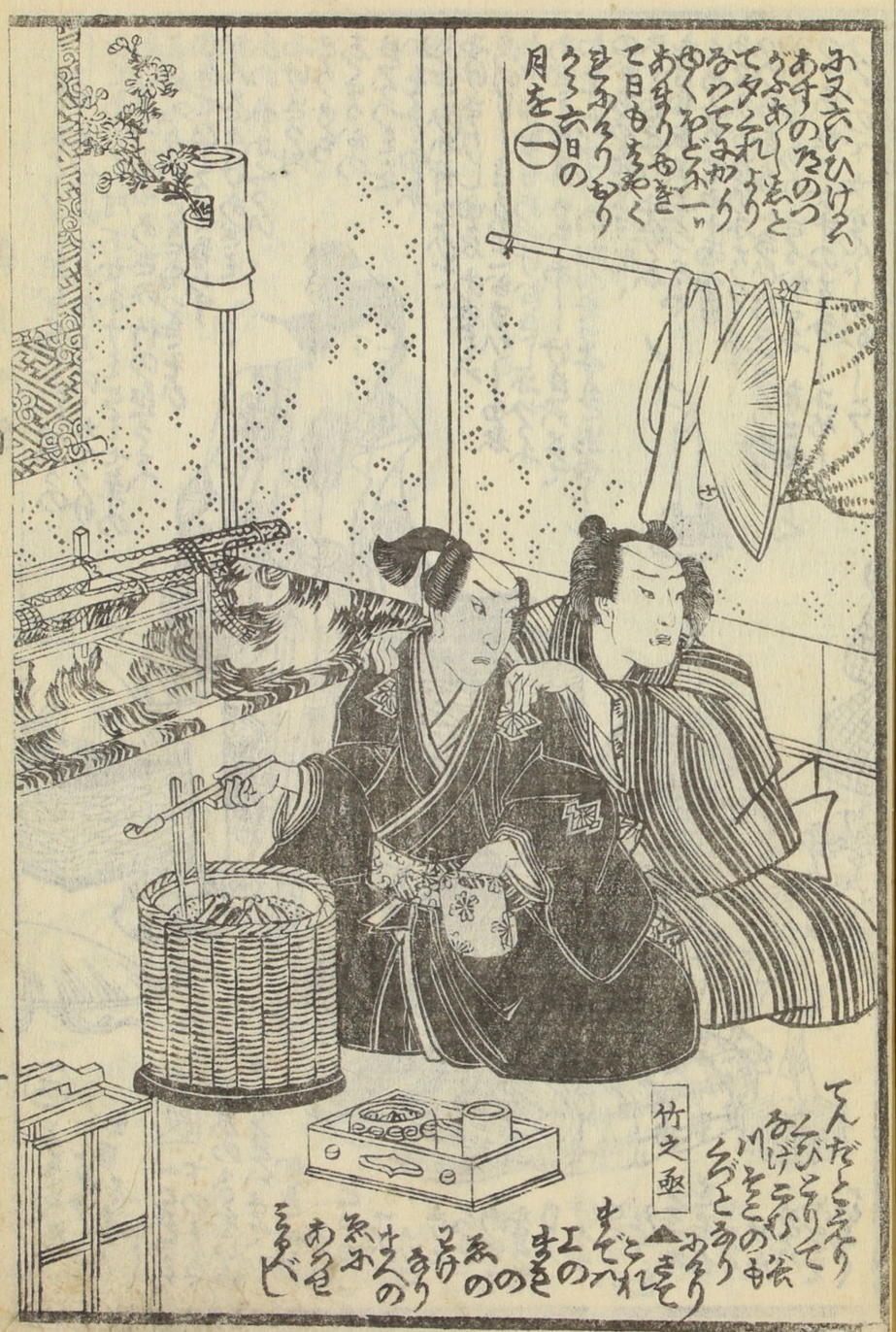
かくて大とげその日のタぐれおいらんのうぐひすをしのびうらの茶やのやどよりうちでさまりけるふところへぐをやてでもんもいるとめりをこころもあざしきをもうごうひとまわりしもあとようりきうりきうりきうりぬづをとこあるのもいちゞさきあるひこうくみうりめうどたべてのちあとうらとまりしおもろうりのそくふおろうかおとけふおひろひもくとうきてをあろうろんせとしんとしへ四ぢうろうりてのいとこあるいすくうきうちのきゝばもんおてみてをこんなふのおつこひばあろくしぢそれ男もおろうみろう

（二）

ちとけふむうん「おまえへおまんさとのそうとへうえんぬ四人ごやぐぢこあるゆき志ゆのづや・おとけのくきいうこしへてつつのざいのあのおなこまえへさんけいのこつをふこころをひとうたびそをふあるろふのの女そうらふ人なちのつをふうりしぶそまうらくも人ぐきをつけてそうゆうすま・男へさうでおろぞい

忠僕長介

細井竹之亟



ゑゐんまつりのやうすをつぶさにかきつゞりてとゞまるものゝやあらんとおもひたちぬ
あるひはあさんさゝら川のほとりのうちわのうりこゑ
やまとめぐりのうらなひのこゑ
ありてゑゐんまつりをみるこゝちもあれこゝろおもへそのよるの
あやめふく川のつゆ
おとゞ「さあとうさだうでもつとおさまれ
にくさうりませこまこもゑんまのさんきく
とそうるさゝやあすうらもまへうこ
うりにせんへやりませうと
五月
ゆくてはあくろうあき
やこのかみ男ふうふ
ふつとたちてこゝを立
いでゝもちくのそゝをしふ
きけべ男かへびつまへ
おまんとてむねさし
きうのどもまこもも
まへおとげいよき
つれをそこり
とそよろこべ
ひり
▲さて此月の
ことわりみやこうし

（二）
たゝうみ川のやとりをとりし時又ゑんまこゝおくをしづりのをもいんずうしろうり
おとなをまちこゝきえめつまのおまへむまんまむ
かひやこゝろのきいふをひきいざせりおこびつけり「さてさてあのせうこゝへべうみこんざさへこゝをたゝてもきゝてれわつへおとげいか女のねんてきふかりこゝせとちゞこつくおこんにをゞしてつきたゞー「たんでまいる「かつ

六段

ゆきあひをもとめんとこゝろざしあるゆゑ
ひそかにかのやまぶきをおりとりて
廿四丁ばかりつゞきくしこゝみて川のあくをまちもち
ゐさるを武けさまもこゝろあそぶとりぶ行の亟げあもと
てけまさごやよとぐまりけり

八段

かくて行の亟こゝふ二月
ありけふいまぐ川どのまりけるたいらのうさ
まらじおかのてんぐにぐとりすそくるをまぶかにひきさげ
只八をさりげなーいもんきくひ
ろるすどもりをみきらくり
▲さてけとのりごしきみくこれを
川どあみてあーをとくめこる
二人のさむらひあとうへ廿五六町
ゆきさのんとぐふ一人はよみちのまろ

ある吉とのへきゆうこひのをとうごとのり物をさうん竹の亟っ
只八のわをきてへごてのうくかをそのまゐおけてさー
のそきをとてのある吉やもこをせてあるっひそくとさくやきつくたるひふちうるみ
きてよんこびけりありつきふまるす

九段

うくてひあくるあさ
大井川あきけをべ

竹の亜も長久を
つきてしまうさこぞやを
きのでは佐よの中山み
さしうう竹ふときき
むさんの木
のきゅう
竹の亜
長久
おとくろる吉
(二)亜ト
いけれ
べそうう
かやを
みあのせい
うのいろを
ゆそうけ
・きのんていろ
さまやさを
る亦もも
とも
こ亜を
ゆけなん
しわりろ
うう
・行
の
亜

梅野左門
松の本か
三人こし
うみまん行の亜
おむろ
てそのの
んごとを
おひとと
なるへ
わるく
そ
も川とあ
うう
のとごやごう
たるとうう
ざーきふ
あのしか
おのやこき
山中熊太郎
今へぶん
トとり

竹之丞

てんがいと名をうたてあざまくぐるよーをきくらぐーひそそろをたづねそぐり川どのふあーをとぐあ尺八のねみのーやとおりひかうそをすしてうぐひーふそのゆとろろ〳〵尺八ふうろをしてんぐりとありしゆ衣すぐふゆとこそこうそんとふありしゆ衣ひーぐどてんぢゆうぶそそくきのあゆうぶそそくきあーきとぢりひそそとゆとよりきうふそめでゆでふをちぶせをろーうるろりかーやっそ〳〵大内たくくのすゆのけらへせつーやくさりんこそうろふそうる吉とてをとうおてい行の亟うこきのめんてのごそんんーあきゆ衣のんちぐいごのつとゆとりつぶこそてさりんふこそ「ゆ尺八をとりのぶこそてさりんふこそ「ゆどりーめくくきをたづんとてあうますくぐるゆのりちうるふをまそうこきをこうけしふ尺八ゆ衣ふおりうーひそのうけへうゆうとありしゆどゆをうーてんぐいおづきのうくふあーをけてゆきーゆ衣うしうをたづゆまへちゆうらの一ッ

てんぐの

ゆるゆうべきゆ衣仏尺八そのゆとくちんぜやとと尺八をあくふへてそれゆきくり

吉良

そいぜんよりおをまーなるをびこゆるうぐひめうをきりしをそそ

左ゑん

そせのでてんぐいうてすてかーしゆそくるゆとこーぬきゆちさゆんふ

むろひ「さてハ
竹のまんぢう楊の
よるこそとハ山中
くまぢう人の
名ハてんぐんう
うちかく
ごせよとゆびず
さりぬきあ
ゐをあふもお
よくもまくら
らきかりひ
たちおとふ
ゆきすぎし
行のをふり
うろふ
てんぐんびき
つさきをげー
くさりんあさで
をうけるやうするをみ
行の色ぬきみをさげ
さをよりてんぐりび
きりこむうひきをうと
ろよりうこるの
いなつまりうと
しうでハろう
とおろうあり

たちのうく
さをさんろう吉あ
ひうちふけり行の色
「せんーやいすけ
おうーふあ
たまろうらをうあ
うてんぐんびかか
やこおやこの
うくきはな
うりおんもあ
らんヨうきひて
ゐいをあらせ「ろかこんけ
たきうちくくとをとうり
のうち行の色ぐるやへひつきのへ
へんをようそてきろべー

「主殿」そもしさそおきこふ又
の内おそよう殿公のくろんまひ二人
ちろうむすめおんぐれへきよしんん
のまあくしやまへおさのおりちんと
たんときおるじくろんまひぃと川
るうりとそのふあやうをつとむろ

竹の亟毎てひと由

忠義下女小ざく

(二)

士度

竹の亟つま朝ゲれ

(一)

つくりかるつくるあるふうそ

（一）

竹の亜母もあつ〳〵ずふきうらたきうちふそく〳〵さまよひ

（二）

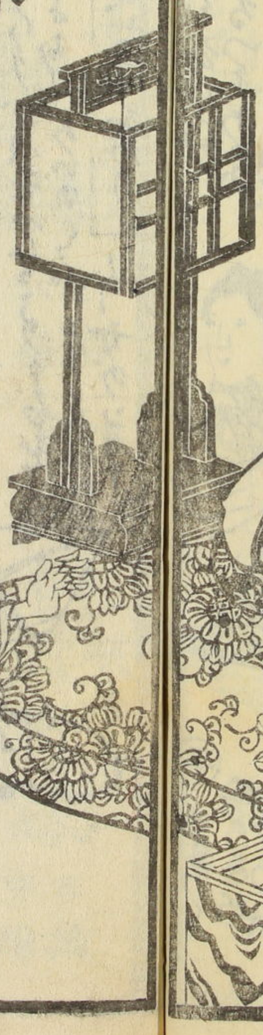
さま〳〵のうきめみおひやう〳〵のるふそとみりたるとでもむきのこんまへ

たき日みもるそ〳〵このつもゝ女うろのそうろのさふ〳〵ぐあうをるうぐ〳〵てうそうろ
▲そのようのゆりふそうろうんぜおんあ〳〵つかせへいろはあさうれそれおんちうまをいのりてつまゝく
とうらもんへそのふうきをつくりたるつそのふうきをもゝへざうもふそをりもんぢ竹のをそをそゝめくうときこせへたるう〳〵ねとつくしまざゝへ二つのつくそうり竹のをふすまくふひてゆきひとうりおやふそうをうけ〳〵へ二つのつゝみうりそるうりのうきけ竹のをゝさぬ不着ををかし〳〵なゝのふうさぬ不着をなしさうろへ三つのつくそうり竹のをぢおとをもくうけぢちしてふるへきをうけぢちしてふるへきをうけぢちしてふるへきを

ねごと

ありくもちやのもちやのさめぬまに
をのぶつるりやうかひありやうかひ
あり神てやとけをいのらばまづ入
るおふうみをそだて着のうちを
つとめ着のうちをたゞしくまていのら
ざるをばいつてでるなやくあくんまろく
どもるんだいよのあくまどもいりこつて仕の
おくつくつて着しんるるもの多女を男おし
てあんぜんのさしうへつぞや

ありもうそんぢふかきらんぢやの中のぢんぶつとも神やとけをいのりてりやくうとうろもとふたものすうあり
くもこそせよとてひとひらのたんざくをさづけのひつ匁ふひうりをえなちて西のくうへとびさうたまひしとぢこ



ふぢく

あさありまつとみたんざくありあさぐれおしへてこそとべ
ともをしへのそちふかうのんねバ神もやとけもりぞまるらん
かぐれひさひふ

朝顔物語 山東庵京山作 梅蝶樓国貞画 七編八編	櫻姫傾草帋 同 梅蝶樓国貞画 一猛齋芳虎画 二編三編	うこん物語 同 梅蝶樓国貞画 四編五編	龍櫻箱根朝露 玉塵園雪住作 一猛齋芳虎画 三編四編
糸櫻春蝶奇縁 一笑齋作 房種画 三編四編	勝角力花の顔觸 並木舎五瓶作 梅蝶樓国貞画 初編出板	音菊百物語 同 同 同	須磨の浦白浪 墨亭魯文作 房種画 同

書物地本問屋 錦森堂 江戸馬喰町二丁目 森屋治兵衛版

さてげ「あり
がたや
▲こをようのち
竹の垂ざかしき
うちのるん
ひつぎの
八ろんふ
ちろ
ひきろぐき
物狂ひ
めでたし

京山作 國貞画

▲ちんのとよ上ル代分私ふせて京山作
仕ル物ぐり・探ひめ物評出板
▲歴世女鑑前四冊京山作
代本ハ非ル作ちまもく
ふろぐのうろりかれをてなるよ
おろするのワけぐよ
ろのちぐまで
きへ件前新物語七編あり

（一）かりろるをふく
ろ一なるかなきの
本ちり女中の
ろろをけん
あるべき物
あれが
れのまの
本やそ
れのあ
けん
ろ